まえがき

多くの書物が教えてくれるように，古来，人は，太陽の動き，月の満ち欠け，潮の満ち引きといった自然が繰り出す周期によって，時間の流れを知覚してきた。そして，時代は移り，たとえばある社会では文明化がおこる。機械化，産業化，社会の複雑化のもとで，カレンダーが導入され，時計が重宝され，それらは人々の時間意識に作用する。現代に生きるわたしたちは，時間を管理しながらも，ともすれば時間に縛られているような感覚さえおぼえる。

「時間が決定されるためには，人間とは無関係のものであれ，人間が創り出したものであれ，さまざまな物理的な経過の他に，同時ではなく連続して起こる出来事を頭のなかで統一する能力，一緒のものとして見る能力をもった人間が前提条件になる」（エリアス 1996: 8，井本晌二・青木誠之訳『時間について』法政大学出版局）。時間は，物理的時間と心理的時間，自然時間と社会的時間などといった二元論でもって切り分けられ，学問領域分断的に語られることが多いが，社会学者ノルベルト・エリアスのこの言葉は「社会的な時間」と「物理学的な時間」を対峙させるだけでは時間は考察しえないこと，二つに分裂した事象としての「自然」と「人間」や「自然」と「社会」の対比ではなく，「自然における人間」および「自然と社会の相互依存」が〈時間〉を理解するのに必要な基本概念であることを気づかせる。

いま，人との関係に限定して考察するにしても，時間は多義的である。自然，天体の周期，季節の移り変わりなど肌で感じる時間（自然時間と名づけよう），呼吸や心臓の鼓動，さらに体内で感じる周期的な時間（生物的時間），時計で計測し，時刻表で管理できるような時間（社会的時間）

がひとまず考えられる（宇宙のなかの人間，その一部として考えれば，物理的時間も考えに入れることになるのかもしれない）。それらすべてが，ある地点，ある時代，ある社会，ある文化に生きる人のなかに，「時間」という名のもとに統合され，つねに同期しているかのようである。そしてその「時間感覚」はヒトのばあいには言葉を通じても，継承される。言語は，人々の時間の切り分けかたを語としてかため，過去・現在・未来を語彙と文法のなかに落とし込む。そしてそのコミュニティに伝達可能な形で〈時間〉は言語知識のなかに包まれ継承されるのである。

言語のなかに自然時間はどのように刻まれているのであろうか。自然の周期は初期的な段階から知覚されるものだと思われるから，基本語彙に見てとることができよう。それらの語には，人が環境に適応しながらその環境的世界を言葉でもって分けていったときのやりかたを見せてくれるかもしれない。さらに言えば，どの言語にも共通する，時間を表現するカテゴリは人間の時間認識の基本的な構造をわかりやすく示してくれるかもわからない。さらに思考を進めれば，時間認識は，文明化された社会とそうでない社会の言語に，ある言語のいまとむかしの姿に，どのようにあらわれてくるのだろうか。そして，それはこころの時間の解明に，また脳を中心とした神経活動における「時間生成」を考察するのにどのような手がかりを与えてくれるであろうか。

このように生まれ出る問いは壮大であり，たかだかいくつかの言語をとりあげていくつかの時間表現を観察して，なにかが出てくるようなものではない。自然時間，生物的時間，社会的時間などの統合として，人のなかに在る〈時間〉概念を考えるならばなおさらである。本書を通してあきらかにできることはきわめてかぎられているが，時間表現の言語学的分析，言語を通して人間の時間認識の一端を見ることと，さらに「時間と言語」をテーマにしたときに考えるべき諸事象について議論することは，手始めになる。

本書は「時間と言語」をおおきなテーマに，言語学，哲学，神経科学

の研究者たちがそれぞれの専門から自身の研究の最前線を明かす，そんな本である。全14章。多くの章は，時間に関する言語表現に焦点を当てる。出てくる言語は，日本語，中国語，トルコ語，英語，ロシア語，オセアニアのティンリン語，シベリアのエウェン語。時間に関する文法と語彙の諸問題をさまざまな側面から論じる。とくに空間表現と時間表現の関係，因果，時制，個別言語の時間表現を各章で取り上げている。このような，言語表現を始点として言語の内側から人間の時間認識を探る試みのなかに，第2章には神経科学，第6章と第7章には哲学の論考が登場して，「いったいぜんたい人間の言語は〈時間〉に関わってなにをしているのか」という問いを言語研究者に，時間研究者に，そして読者に投げかけてこよう。たとえば，なんらかの脳の損傷で「時間を失った」患者さんの語りに，さらには，言語をもつヒトとそれをもたないヒト以外の動物の記憶と時間の問題に，「時間と言語」を考えるのに外せない基盤的考察の存在を意識する。

時間というのは，考えてみれば，「世界」の中心にある。ここでいう世界とは，一つには〈自己〉を中心として構成する世界。自己認識，自己をめぐる数多の経験の記憶において，時間概念は不可欠である。自己が現実世界に結びついている実感を〈時間〉は与える。もう一つには，世界の諸現象を覗く窓として学問的探究が機能しているとして，それでもって世界を理解することが可能であるときに，さまざまな学問領域にわたってそれが主要な対象ないし論題として研究されるという意味合いにおいてである。すなわち，ヒトを含めた生物の生命の営み，宇宙，天体，自然法則，因果，運動，音楽，言語の線条性とその制約ゆえの構造，文化の継承，歴史などを理解するには，「時間」という概念の想定ないしその関係における批判的検証を経なければならない。

さまざまな学問領域において考察される「時間」はそれぞれの理論の姿をとる。物理学，哲学，生物学，人類学，社会学などには時間を主題とした研究があり，とくに物理学と哲学には重厚かつ濃密な研究の蓄積

がある。そして学問分野を越えた議論も始まっている（たとえば，物理学と哲学の「時間の流れ」および「現在」をめぐる議論は森田邦久編著『〈現在〉という謎―時間の空間化批判』勁草書房，2019年）。さらに，神経生理学者の北澤茂先生を領域代表とした新学術領域研究「こころの時間学――現在・過去・未来の起源を求めて――」（2013-2017年度）とそれに続く「時間生成学――時を生み出すこころの仕組み」（2018年度より現在継続中）といった研究プロジェクトにおいては，学問領域間の対話，共同研究が積極的におこなわれ，新しい知の形成と結集が期待される。

本書はこの時間生成学の一つの計画班「言語による時間生成」（研究代表者：嶋田珠巳，課題番号：JP18H05521）で企画した最初の出版物である。「新学術領域」としてさまざまな分野が集って「時間学」を形成するには，それぞれの分野で論じられている「時間」にすこしずつでも接近しないことには対話が生まれない。ある分野の研究者たちが他の分野の研究に触れつつ，共通の概念，コードをもって議論することは一般的な方法であろう。他分野へもむかう好奇心を原動力に，時間に関する言語研究を異分野の時間研究者に開くこと，言語学を外に開くことをひとまずやってみようというのが本書の趣旨である。

本書にいたる前には，講師による講演とディスカッションを中心とした公開型研究会「時間言語フォーラム」および「言語による時間生成」プロジェクトメンバーとの研究会などがあり，本書はこのプロジェクトの計画班・公募班メンバー，フォーラムの講師・参加者が執筆している。時間言語フォーラムは，これまでに6回にわたって「時間の語彙」「時間順序と因果」「時間と脳と言語」「時間・空間・ダイクシス」「コーパスと言語処理技術によるアプローチ」「時間と言語の哲学」といったテーマで開催した。

本書の章立ては，おおきくは一般的な問題から個別への流れをつくり，時間と空間，理由節とテンスなど，共通するトピックは近接するように，さらには共通要素のバトンを引き継ぐようなかたちで構成した。第1章

は序章として，言語学になじみのない読者にも言語を見る基本概念がつかめるようになっている。章立ては流れを意識して構成したが，各章は独立している。読みかたは読者にゆだねたい。「時間と言語」の諸議論が読者の興味を喚起し，これからのさまざまな研究，考察につながっていくことを想像する。

2020 年 10 月

編者

時間と言語

◉

目　次

まえがき …… iii

第 1 章　「時間と言語」に関する基礎的考察 …… **嶋田珠巳** … 1

1.　はじめに …… 1
2.　言葉のなかにあふれる時間 …… 3
3.　時間意味の発生 …… 5
　3.1　語が内包する時間と語が指示する時間 …… 5
　3.2　文さらに発話における時間意味の発生 …… 6
4.　ヒトの時間認識と言語学的接点 …… 9
　4.1　時間認識とテンス …… 9
　4.2　言語から見える普遍と個別事情 …… 10
5.　テンスとアスペクトにみる「時間の流れ」…… 12
　5.1　アスペクトに透ける A 系列 …… 12
　5.2　時間的ダイクシスとテンス …… 15
6.　結びにかえて …… 17

第 2 章　時間の流れの科学――患者さんの内観からわかること
…… 河村　満・越智隆太・花塚優貴・二村明徳・緑川　晶 … 24

1.　はじめに …… 24
2.　時間見当識の評価 …… 24
　2.1　時間の見当識を確認すること …… 24
　2.2　時間認知検査 …… 25
　2.3　時間見当識障害 …… 25
3.　時間消失の内観 …… 26
　3.1　時間認知障害自験例（出血性脳梗塞）…… 26
4.　時間を失った患者さんたちの社会生活 …… 31
　4.1　疾患を越えた時間感覚の変化 …… 31
　4.2　3 者の時間感覚の共通性 …… 34

4.3　時間感覚の変化と社会とのつながり …… 36
5.　結語 …… 38

第 3 章　日本語時間名詞の構造 …… 田窪行則 … 40

1.　はじめに …… 40
2.　さまざまな時間名詞 …… 40
2.1　時間名詞の分類 …… 41
2.2　ダイクティックな時間名詞 …… 42
3.　「今ごろ」と時間の構造 …… 43
3.1　「今」と「今ごろ」 …… 44
3.2　発話時の対応時間を表す「今ごろ」 …… 44
3.3　今ごろと推論 …… 48
3.4　今ごろと反事実世界 …… 49
4.　時間構造と対応物 …… 52
4.1　今ごろの時間 …… 52
4.2　「今ごろ」と領域間マッピング …… 52
5.　おわりに　構造と対応物 …… 55

第 4 章　中国語時間詞の空間性——〈過去〉と〈未来〉の空間メタファー …… 木村英樹 … 59

1.　はじめに …… 59
2.　中国語の「時間詞」 …… 59
2.1　「時間詞」の機能 …… 59
2.2　「時間詞」の種類 …… 60
3.　直示的時間詞の空間性 …… 60
3.1　「横軸系」について …… 61
3.2　「縦軸系」について …… 70
4.　むすび …… 74

第5章　指示と時間——トルコ語の指示詞 şu を手がかりとして
林　徹 … 75

1.　はじめに …… 75
2.　ダイクシス表現 …… 76
3.　指示詞 …… 78
4.　トルコ語の指示詞の区別 …… 79
5.　レゴを使ったトルコ語指示詞の実験 …… 81
　5.1　実験の概要 …… 81
　5.2　発言者から指示対象までの距離による指示詞の使い分け …… 82
　5.3　身振り（ジェスチャー）を伴うかどうか …… 85
　5.4　距離に関係しない指示詞 şu の働き …… 86
6.　言葉による指示行為 …… 87
7.　トルコ語の指示詞 şu と時間 …… 88
8.　まとめ …… 91

第6章　エピソード記憶と言語——タイプからトークンへ
青山拓央 … 95

1.　はじめに …… 95
2.　エピソード記憶の諸定義 …… 96
　2.1　エピソード記憶と意味記憶 …… 96
　2.2　三つの要素と二つの要素 …… 98
3.　ミニマムなエピソード様記憶 …… 101
　3.1　エピソード性と記憶性 …… 101
　3.2　トークンとタイプ …… 103
4.　言語と出来事トークン …… 106
　4.1　過去の出来事を表象する …… 106
　4.2　動物にとっての適応的価値 …… 108

第 7 章　形而上学的時間論の一方法論としての言語と理論——メタ形而上学的観点から……小山　虎…113

1.　はじめに……113
2.　準備：形而上学とは何か……114
3.　現代形而上学の方法論……115
　3.1　具体例：形而上学的基礎理論 FT……116
　3.2　倫理：形而上学的基礎理論 FT の限界……118
4.　形而上学的基礎理論の用途：分類と比較……120
　4.1　形而上学的時間論はどのように分類されるか……121
　4.2　形而上学的基礎理論はどのように比較されるか……123
5.　改訂か記述か：二種類の形而上学……125

第 8 章　演算子の作用域から見た日本語の時制解釈……中村ちどり…133

1.　はじめに……133
2.　時間解釈の partiality と演算子，スコープ……135
　2.1　タ形とル形による時制の演算の論理的性質……135
　2.2　時制解釈の toy grammar……136
3.　主文の時制……138
　3.1　主文の複合的述語の時制解釈……138
　3.2　超時制，物語の文……138
　3.3　ト書きの時制と視点の移動，スコープ・シフト……140
4.　従属節のテンス解釈……141
　4.1　従属節における相対・絶対テンス解釈の仕組み……141
　4.2　過去と未来の非対称性……144
　4.3　ト書き的解釈と条件節的解釈……147
5.　結論……149

第 9 章　理由節構文の曖昧性と時間順序……西山佑司…152

1.　はじめに……152
2.　because 構文の意味・解釈……152
3.　because 節をめぐる先行研究……154
4.　「認識的 because 説」がかかえる問題……157
　4.1　推論の because 構文の意味表示……157
　4.2　コピュラ文と because 節……159
　4.3　アイロニーに基づく議論……161
5.　why 疑問と because 構文……163
6.　結語……165

第 10 章　因果関係と時間――「原因」「結果」を主名詞とする連体修飾節を中心に……有田節子…167

1.　はじめに……167
2.　論理節と時間節の時制解釈の違い……167
3.　連体修飾節の時制形式と用法……169
4.　「原因」と「結果」……171
　4.1　因果関係と前接時制形式……171
　4.2　結果節の時間解釈と用法……172
　4.3　原因節の時間解釈と用法……176
　4.4　「原因」「結果」の連体修飾節の時間的性質……178
5.　「原因」と「理由」……179
6.　おわりに……182

第 11 章　選択体系機能理論の観点から見た英語の時制――ハリデーの解釈とマティスンの細密化……越智綾子…185

1.　はじめに……185

2.　背景：英語の時制についての様々な見方 …… 186
2.1　時制の伝統的モデル …… 186
2.2　伝統的モデルとの決別 …… 187
3.　フレームワーク／理論的背景：選択体系機能理論 …… 188
3.1　選択体系機能理論 …… 188
3.2　選択体系 …… 188
3.3　多次元的記号空間モデル …… 190
3.4　メタ機能 …… 191
4.　Halliday の時制の文法 …… 191
4.1　英語の時制の原則 …… 191
4.2　時制の二項対立と三項対立 …… 193
4.3　時制の再帰性 …… 194
4.4　英語文法体系全体における時制 …… 197
5.　おわりに：「時間」を表す文法 …… 198

第 12 章　時間の言語的意味のコーパス化——日本語テンス・アスペクト表現理解過程解明に向けて …… 吉本　啓 … 202

1.　はじめに …… 202
2.　研究の概要 …… 204
2.1　NPCMJ とアノテーションの追加 …… 204
2.2　理論的背景 …… 204
3.　アノテーションの原則 …… 206
3.1　基本的な表現 …… 206
3.2　複雑な表現 …… 207
3.3　アスペクト：テイル形の意味 …… 211
4.　アノテーションの実際 …… 212
5.　アノテーションの結果 …… 213
6.　おわりに …… 215

第 13 章　ティンリン語のテンスとアスペクト，時間表現
大角　翠 … 217

1.　はじめに …… 217
2.　ニューカレドニアの社会言語的背景 …… 218
3.　ティンリン語の文法的時間標示 …… 219
　3.1　ティンリン語文の時制とアスペクト …… 219
　3.2　ティンリン語の統語構造と時間標示 …… 220
　3.3　TA，PreMod，PostMod が表す意味の領域 …… 232
4.　時間を表す語彙 …… 234
　4.1　指示詞と時間名詞 …… 234
　4.2　時間と空間の相関 …… 235
5.　おわりに …… 236

第 14 章　時間語彙の対照研究――時間語彙類型論にむけて
鍛治広真・佐々木文彦・嶋田珠巳 … 240

1.　はじめに …… 240
　1.1　語彙項目と語彙的合成表現 …… 241
　1.2　時間名詞の副詞としての用法と形式 …… 241
2.　対照のための枠組み …… 242
　2.1　時間の長さの単位による分類 …… 242
　2.2　周期との関係による分類 …… 243
　2.3　基準時点による分類 …… 243
　2.4　分類基準のまとめ …… 244
3.　基本的な時間語の対照 …… 246
　3.1　日本語 …… 247
　3.2　英語 …… 249
　3.3　ロシア語 …… 250
　3.4　エウェン語 …… 252
　3.5　4 言語の共通点 …… 254

4.　「朝」と「明日」……255
4.1　ツングース諸語の「朝」と「明日」……255
4.2　日本語におけるアシタの意味の歴史的変化……256
5.　結語……261

あとがき……265

主要索引……269

英日対照表……281

執筆者一覧……284